
革新者と魔法少女達の出会い

おなか痛い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革新者と魔法少女達の出会い

【Nコード】

N7227X

【作者名】

おなか痛い

【あらすじ】

ELSとの対話から早2年。ヴェーダからの指示で謎のエネルギー反応を確かめに行った刹那は、突如正体不明の光に飲み込まれてまったく異なる世界へ。そこで刹那は新たな戦いに巻き込まれていく……。

作者は素人中の素人で、この作品は処女作です。

さらにこの小説は作者の勝手な解釈、ご都合主義、妄想を含んでいる場合があります。それでもいいという人は見てみてください。

プロローグ（前書き）

どうも、おなか痛いです。

生まれて初めての小説投稿です。

グダグダになると思いますが、生温かい目で見てください。

プロローグ

西暦2366年、ELSとの対話を終え人類との共存から2年が経過していた。

今ではすべての人類が『イノベーター』となっており、そして『ELS』と共生した

『ハイブリッドイノベーター』が少しずつ増えていつている。

そんな中ソレスタルビーイングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイはヴェーダ

から正体不明のエネルギー反応が観測されたとの情報が入り『ELSクアンタ』を駆りそのポイントまで向かった。

刹那「反応があったのはこのあたりのはずだが？」

だがそこには何も無く宇宙空間が広がっているだけである。

刹那「どういうことだ・・・？」

不思議に思いつつ地球に帰還しようと向かった瞬間、突然刹那の周りの空間が光だした。

刹那「なんだこの光は！？量子ワープとは違う！くっ、コントロールが効かない！！」

刹那はそのまま光に飲まれていった。

第1話

刹那「うつ……。ここは……?」

目を覚ますと、刹那は森の中にいた。

刹那「何故俺は森の中に?宇宙にいたはずでは?」

考えていると刹那はあることに気付く。

刹那「つ!? そうだ!クアンタはどこに!?!」

???「ここです、マスター。」

刹那「誰だ!?!」

そう思いいつの間にか装備されていたブレスレットに目をやると。

???「私です、ELSクアンタです。」

刹那「クアンタ……なのか?」

クアンタ「はい、茫然としているところ申し訳ないのですが、現在の状況を説明します。」

刹那「つ、頼む。」

クアンタの言葉で刹那の表情が戻る。どうしてクアンタがこのようなブレスレットに変わったのか疑問に思ったが、今は聞かず自分の

身の回りで何が起きているのかを確かめるのが先決だと思った。

クアンタ「マスターは光に飲み込まれたのを覚えていますか？」

刹那「ああ。」

クアンタ「マスターが起きるまでの間、光に飲み込まれていてから
のこととこの世界について調べていました。」

刹那「何かわかったことは？」

クアンタ「はい、率直に申し上げますと今ここにいる世界は私たちが
暮らしていた世界とは別の世界、つまり異世界であり多元世界の
ようです。」

刹那「なっ!?!？」

クアンタ「もちろん地球という世界も存在しているのですが、私た
ちの知っている地球とは全く違います。俗に言う並行世界というも
のですね。」

刹那「……。」

言葉を失う刹那。量子ワープでE.L.Sの星に行ったことはあるが、
それとは全く別のことが今自分の身に起こっている。

刹那「他に分かったことはあるか？」

クアンタ「はい、私たちが今いるこの世界は『ミッドチルダ』と言
い魔法という技術が

発達しています。」

刹那「魔法・・・？」

クアンタ「はい、しかし子供の絵本に出てくるような魔法とは根本的に違うようです。大まかに説明すると、魔法を使う人間のことを『魔導師』と言い魔力を持つ人間には『リンカーコア』というものが存在し、『デバイス』という機械を駆使して魔法を使うようです。」

刹那「ずいぶんと機械じみた魔法だな。」

クアンタ「私もそう思います。」

刹那「話が逸れたな。それで？」

クアンタ「いえ、今のところ分かっているのはそれぐらいだけです。」

刹那「そうか、なら次はおまえのことを教えてくれ。」

クアンタ「わかりました。と言っても私も詳しいことは分からないのですが・・・。」

刹那「どういうことだ？」

クアンタ「この世界に来た際にいつの間にかこの姿に変わっていたんです。ちなみに今の私はデバイスの待機状態になっているようです。」

刹那「そうか……。」

ますます謎が深まっていくばかりである。とりあえず今後のことを考えていたら突然クアンタが何かの反応を捉えた。

クアンタ「マスター！正体不明の機影が30機ほどこちらに接近中です！！」

刹那「何！？」

クアンタ「私たちで対処しましょう！」

刹那「しかし、リンカーコアというものが俺にはあるのか？」

クアンタ「はい、この世界に来てからマスターにリンカーコアの存在を感知しています。」

そうこう話をしてる間に先ほどの機影が到着したようで、いきなり刹那たちにむけて攻撃を放ってきた。

刹那「くっ！」

なんとかよける刹那。

クアンタ「マスター！大丈夫ですか！？」

刹那「ああ、だがクアンタ、さっきお前は『私たち』で対処するといったな？どうすればいい？」

クアンタ「簡単ですマスター！私の名前を言った後に『セットアップ』と言つのです。」

刹那「了解した。」

そして手のひらを開けたまま右腕を前にかざす。

刹那「クアンタ、セットアップ！」

革新者の新たな戦いが始まる……。

第1話（後書き）

どうも、おなか痛いです。

刹那の口調こんな感じであってますかね？

つーか、敵30機って多かったかな・・・。

誤字・脱字等がありましたら指摘のほどよろしくお願いします。

第2話（前書き）

戦闘描写ちゃんと書けてるか限りなく不安です・・・。

第2話

刹那「クアンタ、セットアップ！」

刹那の周りからGN粒子が溢れだし包み込む。そして、包んだ粒子が消え刹那の体が機械的なアーマーのようなものに覆われていた。

刹那「これは・・・？」

自分の体を見回してみる。そこで刹那は気付いた。

刹那「ダブルオーライザーなのか？」

そう呟くとクアンタが反応する。

クアンタ「はいマスター、これがこの世界での力です。魔導師はデバイスを使い、『バリアジャケット』というものを自身の体に展開して戦います。そして申し訳ありません、ダブルオークアンタは現在調整中なのでダブルオーライザーの方をお使ください。」

クアンタは申し訳なさそうな声で刹那に謝罪をする。それに対して刹那は・・・

刹那「いや充分だ、問題ない。お前はよくやってくれている、ありがとう。」

クアンタ「いついえそんな・・・。／／／」

ブレスレットなので赤くなっているのかよく分らないが照れたよ

うに喋るクアンタ。

刹那「このまま敵を迎撃するぞ。」

クアンタ「了解ですマスター！」

刹那「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！」

「?????side」

私は高町なのは、機動六課でスターズ分隊の隊長を務めています。私は今部隊長である八神はやて二佐からガジェットが出現したと報告を受け、親友であるフェイトちゃんと一緒に現場に向かっています。

なのは「最近、ガジェットの出現率が多いね。」

フェイト「でも、そのために私たちがいるから。」

なのは「うん、そうだね。そういえばさっき一瞬だったけどガジェットとは別の魔力反応がなかった？」

フェイト「えっ!?!?どうだったかな? 私は気付かなかったけど……。」

フェイトちゃんは気付かなかったらしい、やっぱり私の勘違いだったのかなぁ……。そう思っていたら現場付近の前方の森の中から緑色の光が溢れてきた。

なのは「!?!?」

フェイト「これは!?!?」

私たちはとても驚いた。でもそれも最初だけで……。

なのは「綺麗……。」

フェイト「うん……。」

私たちはその光におもわず見惚れてしまい、こんなに綺麗なものがあるのだろうか？そう思わせるぐらい鮮やかで淡い光を放っていた。そして、光が収まると同時にとてつもない魔力反応を感じた。

なのは「なに、この魔力反応!？」

フェイト「早く現場に向かおう！」

なのは「うんっ！」

フェイトちゃんにそう言われて私たちは急いで現場に向かった。

~~~~~side end~~~~~

刹那「喰らえ！」

両腰にあるGNソード?を抜きライフルモードに切り替えアンノウンに対して、GNビームライフルを放つ。しかしそれはアンノウンの前で霧散する。

刹那「何!？」

GNビームライフルが効かないことに驚く刹那。

クアンタ「マスター私が解析したところやつらはガジェットと呼ばれる機体で、さらにこのガジェットには『アンチマギックファイールドAMF』というものが装



備させられています。」

刹那「AMF?」

クアンタ「いいですか、よく聞いてください。この世界でのマスターの攻撃は全て魔力によるものになります。

AMFは魔力による攻撃を防ぐバリアのようなものです。」

刹那「なら俺の攻撃はやつらには効かないということか?」

クアンタ「ご安心ください。AMFにも限界があるらしくあまりに強い攻撃は防ぎきれないようです。ここは接近戦が有効かと。」

刹那「了解した。」

クアンタの説明を聞いて刹那はソードモードに変えて、目の前のガジェットに斬りかかる。

刹那「ここは俺の距離だ!!」

向こうもかかってくるがどんどん切り崩されていく。死角から向かってくるもすぐに反応して

刹那「遅い!!」

相手の攻撃を受け流しながらクロスに相手を斬る。

刹那「クアンタ、GNソード?は使えないのか?」

クアンタ「もちろん使えます。」

刹那「用意してくれ」

クアンタ「了解ですマスター。」

GNソード？を腰にしまおうとクアンタが。

クアンタ「GNソード？set up。」

急に電子音声つぼくなったことに内心少し驚いたが、すぐに考えるのをやめると右手にさきほどのGNソード？よりも大きいGNソード？が展開された。

刹那「よしっ、これなら。」

そう呟き、再びガジェットに向かっていき5体ほどをまとめてなぎ払う。いつの間にか残るガジェットも1体になっていた。

刹那「残るは機体はあいつのみだ！」

クアンタ「いきましようマスター！」

そう言いながら残る1体に向かっていく刹那とクアンタ。

刹那（この世界でも戦いが起こっている、何故この世界に飛ばされたかは分からないが戦いを生み出すものがある以上俺は戦う。）

クアンタ（この世界に飛ばされた理由はまだ分からないけど、マスターと一緒にどこへだって！）

刹那「そつだ、これが！」

刹那&クアンタ「俺（私）たちの、ガンダムだ（です）！！」

最後のガジェットは、横に一刀両断され爆発した。

この先、何が起ころうとしているのか……。

## 第2話（後書き）

どうもです。

戦闘描写ちゃんと書けていたでしょうか？

まあそっちの心配もあるんですがなのはとフェイトの喋り方だいじょうぶかな？

ぶっちゃけ言っちゃうとなのはの原作見てないんだよね。1つも・・・。

なのはの知識はこのサイトで培ったものだからなあ。

まっなんとかなると思いがンバロ

読者の方もテキストに読んでください。

誤字・脱字等あったら指摘のほどよろしく願います。

## 主人公&デバイス設定(前書き)

やっぱり主人公は強くないとな

## 主人公&デバイス設定

刹那・F・セイエイ

ガンダム00の主人公であり、この物語の主人公である。

年齢：飛ばされる前と変わらず

容姿：ELSが金属体から元の肉体に直してくれた。

魔力値ランク：SSSランク

趣味：筋トレ

ELSと融合しているせいかな身体能力は常人のそれを軽く上回っており、イノベーターとしての能力も健在である。若返っているが、別段精神年齢が若くなったというわけでもない。物語が進むにつれてヒロインたちから好意を受けるが、生まれてから『人を好き』になっただけがないのでどう対処していいかわからないため、前の世界の女性仲間と同じように接してしまう。つまり、『鈍感』・・・なのかな？

ELSとの対話を終えて帰ってきて地球に戻り2年間の中で老衰したマリナと一緒に暮らしたこともありそのおかげか、先の大戦と比べてだいぶ表情がやわらかくなった。彼女が亡くなってからはソレスタルビーイングとしての仕事を再び全うしていた。

専用デバイス 『クアンタ』

種類：インテリジェントデバイス

人格：礼儀正しい女性

待機時：青と緑が混ざった（GNソード？）のような色のブレスレット

使用時（バリアジャケット装備時）：今のところダブルオーライザーの装甲と武器を使用者に纏わせる感じ

こちらの世界に飛ばされた際に刹那の搭乗していたELSクアンタがデバイスに変化したもの。完全な自我を持っており、音声はもちろん様々な機能を搭載している。刹那のことを心から信頼しており、どんなことがあっても刹那の味方であると決めている。

なるうと思えば女性の姿になることもできるが、バリアジャケットを装備するにはブレスレットの状態に戻る必要がある。ちなみに刹那はまだこのことは知らない。

## 主人公&デバイス設定（後書き）

こんなもんでどうでしょう？



### 第3話（前書き）

いよいよ、なのはたちとの邂逅。

P・S 刹那は作者の中でトッピーに入るくらいのかっこよいです。

### 第3話

「なのはside」

私たちが現場に到着したときには既に戦闘が終わっていて、爆発した後の煙のせいでよく見えなかったがそこには男性であろう人が立っていて、見たこともないバリアジャケットを装備していた。

フェイト「あの人をやったのかな？」

なのは「多分そうだと思う。」

煙が晴れると、切り崩された大量のガジェットの残骸が転がっていた。

フェイト「これ、ガジェット!？」

なのは「すごい!全て1人で倒したの!？」

私でも1人でこの数を相手にすることはできない。なのにそこにいる人は1人で倒したなんて、『強い』それしか頭に出てこなかった。

フェイト「とりあえず話を聞いてみよう。」

なのは「そうだね。」

とりあえず男性のそばへと近づき。

なのは「あの、少しよろしいでしょうか?」

「なのはside end」

「刹那side」

クアンタ「敵ガジェット的全滅を確認しました。」

クアンタが俺にそう教えてくれる。

刹那「そうか、だがこの後どう動くべきか。」

クアンタ「そうですね、こういう存在がいるとわかった以上うかつに行動できませんね。」

俺たちは次にどう行動すべきかを考えていた。するとクアンタが。

クアンタ「マスター、再び周辺に魔力反応あり先ほどとは比べ物になりません。」

刹那「敵か？」

クアンタ「まだ分かりませんが、ただ・・・この反応は人ですね。」

人？ちょうどいい、敵か味方かはわからないが話を聞くことぐらいはできるだろう。そう考えていると・・・。

「???」あの、少しよろしいでしょうか？」

後ろから声が聞こえてきて、俺に話しかけているのか？そう思い後ろを向くと、2人の女性がこちらを向いていた。

刹那「お前たちは何者だ？」

俺は最も疑問にしていたことを2人に述べる。すると茶髪の女性は

????「あっはい、私たちは時空管理局のものです。」

時空管理局？なんだそれは？そう考えていると、クアンタの音が頭の中に響く。

クアンタ「マスター、聞こえますか？」

これは、脳量子波？

クアンタ「いえ、似ていますがこの世界では『念話』といい魔法の一種です。』

俺の考えていることが分かるのか、クアンタはそう答える。脳量子波に近いものならそう難しいことではないだろう。

刹那「それでクアンタ時空管理局とはいったいなんだ？」

クアンタ「簡単に言ってしまうえば私たちの世界でもあった軍のようなものです。』

刹那「軍か……。』

俺は頭の中でそう呟きクアンタとの念話に集中していると。

「????」あの〜。聞こえていますか?」

聞こえていないと思ったのか、痺れを切らしたのか茶髪の彼女は心配そうな目で俺を見てくる。

刹那「つすまない、考え事をしていた。それでその時空管理局が俺に何の用だ?」

そう言うと、もう1人の金髪が

「????」はい、このガジェットはあなたが倒したんですよね?詳しく話を聞きたいので機動六課に御同行をお願いできますか?」

刹那「分かった。」

そついい、俺はバリアジャケットをしまっ。

「????」ありがとうございます。あっ自己紹介が遅れました、時空管理局機動六課所属スターズ分隊の隊長を務めている高町なのはいいます。」

「????」同じく機動六課所属ライトニング分隊の隊長を務めているフェイト・T・ハラウンといいます。」

2人は俺に自己紹介をしてくる。こんな女の子たちが隊長を務めているとは……。

なのは「あなたの名前も教えてくださいませんか?」

刹那「刹那・F・セイエイだ。」

自己紹介を終えた俺はへりで2人が所属しているという機動六課へと一緒に向かった。

刹那 side end

3人は機動六課に到着して2人は刹那を部隊長室まで案内し、中に

はショートヘアの女性が1人椅子に座っておりその肩に手のひらサイズの女の子が座って待っていた。

なのは「高町なのは、フェイト・T・ハラウンただいま任務を終え帰還しました。」

2人はその女性に対して敬礼をした。

???「うん、おつかれさん。口調も戻してええよ、おかえり。」

なのは「ただいま、はやてちゃん。」

はやて「それで、その人が報告にあった？」

刹那「刹那・F・セイエイだ。」

はやて「私は時空管理局機動六課部隊長八神はやてといます。」

リン「私はリンフォーツウアイスエエといますう。」

軽く自己紹介を終え、さっそく本題にはいった。

はやて「それで、さっそく詳しい説明を聞きたいんですけど、何故あの森に？」

刹那「わからない、元いた場所から急に光に包まれて目を覚ますとあの森の中にいた。だがこいつのおかげでこの世界のことは大体把握した。」

そう言うと刹那は右腕につけてるブレスレットをみる。すると

クアンタ「はじめまして、私はマスターのデバイスのクアンタと申します。どうぞお見知りおきを。」

な・フ・は・リ「」「」「喋った!?!?」「」「」

刹那「そんなに珍しいことなのか？」

フェイト「こんな高性能なデバイスはそうそうないと思うよ……。」

「

はやて「セイエイさんは何処でこのデバイスを？」

刹那「それは「マスター」ここは私が「……頼む。」

クアンタが刹那の言葉を遮る。刹那も自分が説明するよりもクアンタが説明した方がいいと思っただのか素直に譲る。

クアンタ「では話を始めます。」

そして説明を始める。こことは『違う地球』つまり『並行世界』から突然この世界に飛ばされたこと、クアンタがデバイスに変わっていったなど様々なことを話していく……刹那の過去を除いて。

はやて「なんや突拍子もない話ですね、こことは別に地球があるなんて。」

なのは「んーと、話を聞く限り刹那さんは『次元漂流者』ってことになりますね。」



刹那「次元漂流者？」

フエイト「はい、次元間に置ける事故等が原因で他の次元へと偶然漂流してしまった人のこと、つまり迷子のようなものです。」

刹那「・・・元の世界に帰還する方法はないかクアンタ？」

クアンタ「今のところは・・・申し訳ありません。」

刹那「いや気にするな、だが今後どのように行動すべきか・・・。」

はやて「そのことなんやけど、つまり刹那さんは行くあてがないということなんですよね？」

刹那「そういうことになるな。」

はやて「なら、機動六課で民間協力者として協力してくれませんか？」

刹那「・・・理由を聞かせてもらってもいいか？」

はやて「はい、ミッドチルダでは不正にデバイスを所持することが禁じられているんですよ。民間協力者として協力してもらえばそう言ったことが未然と防げるので。それに正直言うと管理局は常に人員不足でして、だから力を貸してほしいんですよ。」

刹那「わかった、だがこちらのデバイスのことはここ以外での開示は遠慮してもらえないか？」

はやて「わかりました。」

これで機動六課の仲間入りが決まった。

刹那「これからよろしく頼む俺のことは名前で呼んでくれ敬語も必要ない、慣れてないからな。」

はやて「わかった、ほんなら私たちのことも名前で呼んでな？2人もそれでええか？」

なのは「うん、これからよろしくね刹那くん、クアンタちゃん！」

フェイト「分からないことがあったら何でも聞いてね。」

クアンタ「こちらこそよろしくお願いします。」

すっかり打ち解けていく4人。

はやて「そうやリン、刹那くん機動六課の中を案内を頼むわ！」

リン「はい、分かりましたはやてちゃん！では行きましよう刹那さん！」

刹那「ああ、頼む。」

そついい刹那はリンと共に部隊長室を後にする。

「刹那が出て行ったあとの部隊長率」

はやて「久しぶりやな」男性が六課に入るのは。」

なのは「うん、この隊は女性が多いからね。」

はやて「そう言えば2人ともついさっきガジェットの出現場に行っただけどどういふ状況やったん？」

フェイト「私たちが到着したときには既にガジェットが倒された後だったよ。」

はやて「どういふことや？」

フェイト「たぶんというか刹那が倒したんだと思う……。」

はやて「なっ！？せやかて30機もの数がおったんやで！それを1人で……。」

なのは「だから私たちも最初見たときはびっくりしたよ。」

フェイト「それにまだ余裕がある感じだったしね。」

はやて「なんや、思わぬ戦力を引き当ててもうたな……。」

刹那の強さに驚愕する3人であった。

### 第3話（後書き）

指摘されたところを直して改変しました。幾分かマシになったと思います。感想ページをみて皆さんの意見がとても貴重で、素人の私にとってすごく役立ちます。これからもどうぞよろしく。

誤字・脱字がありましたらご指摘のほどよろしくお願いします。

第4話（前書き）

やっと書けた・・・。

## 第4話

リインに機動六課の中を案内してもらった刹那は、最後に自分の生  
活する部屋まで連れて行ってもらった。

リイン「今日からここが刹那さんの使うお部屋になりますう。中は  
好きに使って構いませんよ。」

刹那「わかった、ありがとう。」

リイン「いいえ、ではまた明日。」

刹那「ああ。」

そついい刹那は自分の部屋に入っていくと、中には生活に必要な最低  
限のものがあつた。

刹那「とりあえず今日はもう休むか……。」

クアンタ「そうですね、明日も忙しいでしょうし。」

刹那はベットに入るといろんなことがあつて疲れたのかすぐに眠り  
に入つた……。

「……き……くだ……い。」

刹那「うっ……。」

「……おき……くだ……い。」

刹那「うっ……うっ……。」

「……起きてください。」

どこからか聞こえる声で目を覚ます。

刹那「ここはどこだ……。」

そう呟きなんとなく前の世界でダブルオーライザーで戦っていたあの男と会話をした空間に少し似ている、そう思った。

「……目が覚めましたか。」

刹那「!?!、誰だ!?!」

突然聞こえてくる声に驚きを隠せない刹那。そこに現れる白い長髪の女性。

「……?」そう身構えないでください、私はあなたの敵ではありません



ん。」

刹那「なら答えろ、お前は何者でこの空間は何だ？」

????「私のことはトウランナとお呼びください。そしてこの空間はあなたの意識の中、私はそこに自分の意識を潜り込ませているだけです。」

刹那「それで、俺に何の用だ。意味もなくこんなことをしたわけではないだろう。」

トウランナ「そうですね、では本題に入らせていただきます。刹那さん、どうかこの世界を救ってください。」

本題に入るといきなり頭を下げるトウランナ。

刹那「どういう意味だ。」

トウランナ「あなたは光に包まれてたのを覚えていますか？」

刹那「ああ。」

トウランナ「あれは私がやったことなんです。」

刹那「つなに？」

彼女の発言に少し困惑する。

トウランナ「実は近い時期この世界で『災厄』が起きようとしています。ですが私の見た感じではこの世界の人たちだけでは対処でき

ないと考えました。しかし私は幼いころから戦い続け最後には世界を救ったあなたに目が行きました。」

刹那「人の過去を見るのはいい趣味ではないな・・・まあいい。あれは俺1人の力ではない、それに最後はみんなで分かりあっただけだ。」

自分は英雄なんかではない、そう言いたいらしい。

刹那「それよりも1つ聞きたいお前は一体何者なんだ？」

すると彼女は

トウランナ「私は数多の世界を監視するもの、あなたたちの言葉で言わせてもらおうと、神に近い存在です。」

刹那「神・・・だと!?!」

今度は驚いた表情で彼女の言った言葉を繰り返す。それもそうだが、自分の世界で『この世界に神はいない』そう言ってきたのだから。

刹那「あまり信じたくはないが・・・いやこの状況下でお前が嘘をつく理由が見当たらない。それに今までの経緯を考えればお前の言うこともまんざら嘘ではないのかもしれない。」

冷静を取り戻しながら彼女に答える。

刹那「それで、何故俺を呼んだ?お前がどうにかすればいい問題ではないのか?」

トウランナ「私が世界に干渉すれば世界に『歪み』が生じる可能性  
があります。一つの世界が滅びれば他の世界にも少なからず何らか  
の影響が出るはずです。だから人の身で強大な力を有しているあな  
たにこうしてお願いしているのです。」

確かに刹那はELSと完全に融合しているため普通のイノベーター  
以上の力を持ち新たな生命体となっている。

刹那「……。」

トウランナ「勝手なことをしてあなたにご迷惑を掛けているとは百  
も承知です！ですがあなたしかいないのです、どうかこの世界を助  
けてください！！」

必死になって頭を下げるトウランナ、それに対して刹那は……。

刹那「分かった、だがお前は1つ勘違いしている。」

トウランナ「えっ……。」

刹那「いくら強い力を持っていたところで1人では世界を救うこと  
はできない。人は助け合って生きるもの、俺はそう思っている。」

そう、刹那も最初の頃は1人で戦っていた時期があった。だがそれ  
は間違いだと気づき、今では人というものの本当の意味を理解して  
いる。

トウランナ「……そう、ですね。フフッ。」

刹那「何を笑っている？」

トウランナ「いえ、やはりあなたを選んで正解だったなと。」

刹那「そうか、よく分からんが。まだ質問がある、クアンタをデバイスに変えたのもお前か？」

トウランナ「はい、この世界で戦うにはやはりこの世界に適した形で戦うのが一番かと。」

刹那「やはりお前だったか……。最後にこの世界で起きようとする災厄、それはいつなんだ？」

トウランナ「それは私にも分かりませんが、ですが災厄は必ず起きます。」

そう言うと刹那の体が徐々に消え始める。

刹那「っこれは!？」

トウランナ「ご安心ください、あなたの意識がもうすぐ眠りから目覚めるだけです。それとここでの会話はこれ以降できないのでご理解ください。」

刹那「わかった。」

トウランナ「では最後に、この世界をお願いします。」

深々と最後に頭を下げるトウランナ。

刹那「ああ。」

軽くではあるがそれに対してちゃんと答える刹那。

そしてその空間からの意識が完全に途絶える。

## 第4話（後書き）

どうもおなか痛いです。

まあ異世界転移なんだからこんな設定でもいいかなって。

てか自分的にはマジで頑張ったほうだと思う。

マジ疲れた……。

第5話（前書き）

書  
け  
た

## 第5話

刹那「ふう……。」「

トウランナとの意識空間での会話から目が覚めた刹那。

刹那「この世界で起きること、か……。」「

と呟き、おでこの上に載せている右手に違和感があることに気付く。

刹那「クアンタが……。ない?」

自分の右手に着けてあるはずのクアンタがないことに少々困惑する。  
すると。

????「あつ、目が覚めましたか?おはようございます。」「

キッチンからでてくる謎の女性、それはかつての仲間『フェルト・グレイス』にそっくりだった。

刹那「!?フェルト・グレイス……。なぜお前がここに?」

驚きを隠せない刹那、しかし女性は。

????「フフツ違いますよマスター、私です。」「

刹那「その声は、クアンタ?」

クアンタ「はい、マスターも忘れていると思います。ですが私は元々EL



Sです。だからこうして人の形を形成することも可能です。もちろん人間としての機能も付いていますよ。」

刹那「そうだったな……。」

フェルトじゃなかったことにどこか残念そうな刹那。

クアンタ「それよりマスター、朝食の用意ができましたので起きてください。」

刹那「分かった。」

そう言われると、テーブルの上にある食事を見ながら席に座る。

刹・ク「いただきます。」

いっしよに朝食を食べる2人。

刹那「それで、何故フェルトの姿なんだ？」

疑問に思っていたことを口にする。

クアンタ「それはですね、私がマスターと融合していたことは知っていますよね？」

刹那「ああ。」

クアンタ「ということはマスターの記憶も共有していることになります。記憶からこの女性が最もマスターとの会話に適しているかと思いましたが。」

刹那「そうだったのか・・・。」

クアンタ「申し訳ありません、共有しているとはいえ勝手にマスタ  
ーの過去を見てしまい。」

刹那「お前に見られても何も問題はない、それに俺を思ってやった  
ことなんだろう?。」

クアンタ「はい・・・。」

刹那「なら気にするな。」

そっぴい軽く笑う。

クアンタ「あっありがとうございます。／＼／」

顔が赤くなるクアンタ。

刹那「どうした、顔が赤いようだが?。」

クアンタ「なんでもないです!。」

刹那「ならいいんだが。それはそうとクアンタ、お前に話して話し  
ておかなければならないことがある。」

いつもの表情に戻る。

クアンタ「・・・なんででしょうか?。」

察したのかクアンタの表情も真剣になる。

眠りに就いた後のことを打ち明けた刹那。

クアンタ「そんなことが・・・。」

刹那「信じてもらえないか？」

真剣な表情でクアンタを見る。

クアンタ「いいえ信じますよ、マスターはそんな冗談を言う人でないことはよく知っていますから。」

笑顔で刹那の質問に答える。

刹那「ありがとう。」

クアンタ「まあその災厄がいつ起こるか分からない以上手の打ちようがありませんし、楽観視するわけではありませんが当面の間はゆっくり考えていきましょう。」

刹那「そう、だな。」

クアンタ「とりあえず気分転換に隊舎の中でも散歩しませんか？昨日案内されましたけど全部は見回れていませんし。」

刹那「別にかまわないが。」

クアンタ「じゃあ行きましょう!」

隊舎内を歩いていると何処からか物音が聞こえてきた。

刹那「この音は?」

クアンタ「誰かが訓練所で戦闘を行っているようです。行ってみませんか?」

刹那「分かった。」

クアンタに促され訓練所に向かう2人。

訓練室に着くと、海の上にある廃墟で見知らぬ男女の4人組がガジエットと交戦中だった。

刹那「これは一体……。」

クアンタ「すごいですね、このような廃墟が海の上にあるなんて。」

なのは「あつ刹那くん、おはよう。」

フェイト「おはよう。」

声ができる方を向くと笑顔で手を振っているのはとフェイトがいた。

刹那「ああ、おはようなのは、フェイト。」

クアンタ「おはようございます、2人とも。」

なのは「あれ、そちらの方は？」

刹那「こいつはクアンタが擬人化した姿だ。」

フェイト「えっ、クアンタって『ユニゾンデバイス』だったの!？」

刹那「ユニゾンデバイス?よく分からんが違うと思うぞ。」

クアンタ「はい、少々長くなるのでその説明はまた後日ということに。」

なのは「うっうん。」

あまり納得していないがしょうがないので首を縦に振る2人。そこに、

「???」お前が例の民間協力者か？」

民間協力者とは自分のことだと思ったのか後ろを向くと、背の高い凛とした女性とそれとは対照的に背の低い勝気な感じの女の子が立っていた。

刹那「お前たちは？」

「???」これはすまない、私の名前はシグナムだ。」

「???」グイータだ。よろしくな。」

刹那「刹那・F・セイエイだ、名前で呼んでくれて構わない。」

クアンタ「マスターのデバイスを務めているクアンタと申します。」

互いに軽く自己紹介を済ませていく4人。するとシグナムが

シグナム「刹那、さっそくだが私と模擬戦をしてくれないか？」

模擬戦を申し込んできた。バトルマニアの血が騒いだようだ。

刹那「・・・なぜ？」

シグナム「いやただ新しく入ってきた者の实力を知りたいと思って

な。」

刹那「なるほど、了解した。」

ヴィータ「すまねえな、本当はただ新しく来たお前と勝負したいだけなんだよ。」

念話でシグナムの代わりに謝ってきた。

刹那「いや、構わない。彼女の言うことはもつともだからな。」

なのは「じゃあ2人の模擬戦ということで・・・みんな、訓練一時中断〜！」

マイクでそういつとさっきまで戦っていた4人がこちらに向かってくる。

???「なのはさん、何かあったんですか？」

青い髪の元気そうな女の子が質問をする。

なのは「え〜とね、まずはみんなに紹介したい人がいます。民間協力者の刹那さんとクアンタさんです。」

刹那「刹那・F・セイエイだよろしく頼む。名前で呼んでくれて構わない。」

クアンタ「マスターのデバイスを務めているクアンタと申します。」

なのは「そしてこの子たちはF.W部隊の私たちの教え子、みんな自

己紹介して。」

「???」スターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士であります!」

「???」スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士であります!」

「???」ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士であります!  
す!」

「???」ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります!  
!それとこの子はフリードリヒと言います。」

順番に自己紹介をしていく4人。

刹那(こんな子供まで前線にでるといいのか・・・?)

スバルとティアナはまだ分かるがそれ以外の2人の年齢が若すぎる  
ことに若干疑問を持つ。

シグナム「さあ互いに自己紹介も済ませたんだ。刹那早く模擬戦を  
始めるぞ!」

刹那「分かった、頼むクアンタ。」

クアンタ「了解、マスター!」

突然ブレスレットになったクアンタになのはとフェイト以外の全員  
が驚愕の表情をする。

刹那「驚いているところすまないが、早く模擬戦を始めよう。」



シグナム「わっわかった。」

そう言うと廃墟の中へと進んだ。

クアンタ「しかしさきほども言いましたが改めてすごいですね、海の上に廃墟なんて。」

なのは「実はこれ本物じゃないんです。」

いきなり空中に立体モニターが出現し、なのはが説明をしてきた。

刹那「本物じゃない？ホログラムみたいなものか？」

なのは「うん、そんなところ。」

クアンタ「でも普通に触れたり、破壊できたり、精巧なホログラムですね。」

この世界の技術に思わず感心するクアンタ。

シグナム「そろそろいいか、刹那。」

刹那「すまない、今準備する。」

クアンタ「マスター全ての武装を非殺傷設定にしておきました。」

刹那「すまない、感謝する。」

クアンタ「ではマスター、私たちの力見せつけてやりましょう!」

刹那「ああ。いくぞクアンタ、セットアップ!」

最初の戦いのように粒子に包まれる刹那。

〈観客side〉

いきなり放たれる緑色の粒子の光に皆驚く。

ティアナ「なにあれ……。」

スバル「よく分かんないけど、綺麗だね。」

キャロ「心が癒されるような感じです。」

エリオ「僕もそう思います。」

淡々と感想を述べていくFWの4人。

なのは「私たちも見るのは2度目だけど、やっぱり綺麗だね。」

フェイト「うん、このまま見続けていたいくらい。」

ヴィータ「すげえな」何モンだあいつ。」

隊長陣も同じような感想を述べていく。

〈観客side end〉

粒子が消えるとバリアジャケットを纏っている刹那が現れた。

シグナム「なんだ、それは・・・?」

今まで見たこともないジャケットに驚きを隠せない。

刹那「これが俺のガンダム、ダブルオーライザーだ。」

シグナム「フフっ、タダ者ではないとうすうす感じてはいたが、どうやら間違っではないなかつたようだな。」

刹那「始めるぞ。」

シグナム「ああ。では、ヴォルケンリッターが烈火の将シグナム、参る！」

刹那「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ、出る！」

第5話（後書き）

F W陣とヴォルケンズの口調あってるか心配だな・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7227x/>

---

革新者と魔法少女達の出会

2011年10月28日05時18分発行